

源氏物語爪印 朝顔卷

村 井 利 彦

【1】朝顔を本格的に語る巻である。朝顔は、光源氏の青春時代をいろどる重要人物の一人だが、地味な存在で、語られた場面はそう多くはない。帚木巻では、空蟬の女房たちの噂話。光源氏が朝顔の花を贈った場面は源氏物語に書かれていないが、大向こうを唸らせる当時格好の話題であつたらしい。葵巻では、六条御息所の陥った恋の泥沼を嫌い、プラトニックな恋を選択する。「逢わない愛」の確立である。賢木巻では、賀茂齋院就任。神聖にして侵すべからざる人となった。その朝顔との文通をやめようとする光源氏の行為は、政治問題化し、須磨落ちの理由の一つにもなっている。薄雲巻では、父・式部卿が死んでいる。彼女が齋院を辞める時がきたことを意味する。以上が彼女について語られた全てである。

【2】文通が政治問題化して以来、朝顔は身をかたく閉ざして謹慎の日々を送ったものとみえる。「宮、わづらはしかりしことをおぼせば、御返りもうちとけて聞こえたまはず」（189）は、そのあたりの事情を語っているものと思われる。

【3】朝顔が里に移ったのは、九月。

【4】朝顔の里、つまり故式部卿宮邸は桃園にあった。桃園というのは、一条大路の北、洛外の地にある。文人たちが住む、文化の香りただよふ場所である。一条摂政伊尹、その孫・行成。光源氏のモデルともいわれる源高明。代明親王一族。問題を起こし齋院を廃されたと思われる齋院・韶子もここに住んでいたらしい。また、源氏物語に縁の深い大齋院選子の住まいもここにあった。紫式部が、朝顔の住まいとして、この地を選んだのは、そういう文化・政治の影をちらつかせると同時に、「桃」の語の発する、浮世離れした桃源郷、時の流れぬ神仙世界のイメージもこのあたりで必要であったからではあるまいか。この巻の光源氏は、昔のままの朝顔を期待しているのだから。

【5】この巻の書き出し、設定はともに花散里の世界に似ている。故桐壺帝時代、

名残りの人々がいるところ。まもなく消えてゆく世界である。

【6】ここまで読んでくると、花散里の登場の唐突感は全くなくなる。朝顔をこんな遠くで初めて本格的に語るのだから、花散里の登場などに驚いてはいられなくなるのである。もっとも、すでに花散里は、彼女の性格そのままに、すっかり源氏物語のなかに定着しているけれども。

【7】女五宮は、故桐壺帝の妹。桐壺帝が「心ことにやむごとく思ひきこえたまへりし」(189)宮であった。ということは、光源氏も、藤壺のところのように、女五の宮の世界にも子供時代から親しく出入りしていたということが推測されよう。後に「童にものしたまへりしを見たてまつりそめし」(191)という女五宮の言葉がある。そうして朝顔と知り合ったと想像すべきである。女五の宮は、おそらく生涯独身で、姪の朝顔を子供のように可愛がっていたと考えられる。いうまでもないことだが、朝顔と藤壺との二重写しが、この巻解釈のポイントであろう。

【8】「古めきたる」女五宮は、朝顔の世界の象徴である。これは、桐壺院の世界、そして光源氏の青春時代が、はるかなる昔に遠のいた例証となるものである。「かしこくも古りたまへるかな」(190)という光源氏の正直な感想は、若いころの女五宮しか知らなかったためであろう。もの皆古くなったが、「いにしへの御物語」(190)が存在する場所。それが桃園の世界である。いかにも花散里巻的世界である。⇒【5】。

【9】葵上の母・大宮は、女五の宮の姉であった(190)。「あらまほしく古りがたき御ありさま」(190)とあるから、大宮は美人で、まだまだ魅力的な人であったらしいことが分かる。ここで大宮に触れたのは、大宮が活躍する次巻への用意であろう。

【10】光源氏が須磨に言及する。「おほえぬ罪にあたりはべりて、知らぬ世にまどひはべりしを」(190)。須磨はまだ生々しい時間の内にある。須磨を忘れられないということは、須磨に関連した事項への拘りを意味する。光源氏は、かの地から帰ってきた後、その拘りを一つずつ丹念に消してきた。残っているのは、正に朝顔のみということかもしれない。

【11】光源氏を見て、女五宮が「内裏の上なむよく似たてまつらせたまへる」という当時の人々の噂に言及するのは、前巻からの連続性を考慮した記述であろう。世の中の人々の発想はそこまでであるが、源氏物語の読者はそうではない。しかし、この女五の宮が、面前の光源氏の美しさを褒めあげるのを聞いていると、光源氏の青春がわずかながらにここの世界には残っていることを、作者が否定のタッチで示そうとしていることに気付くはずである。⇒【8】。

【12】帝は、光源氏の昔の美しさには及ばない。という女五宮の証言。意外に重要かもしれない。次巻で強調されることになるが、逆進化論がこの時代の常識。

「世にかかる光の出でおはしたることとおどろかれはべりし」。これからすると、光源氏は空前ではないかもしれないが、ほとんど絶後の存在ということになる。この点で、源氏物語は常識を破っている。

【13】女五宮の言葉を受け、「内裏の御容貌は、いにしへの世にも並ぶ人なくやとこそ、ありがたく見たてまつりはべれ。あやしき御おしはかりになむ」(191)と光源氏が当時の人々の噂をフォローする。こうすることによって、前巻の秘密暴露を強調してみせる。前巻の意識でもって、この巻を読んでもらいたいという作者の意思表示だろう。

【14】紫上に子供ができぬという構想は、光源氏と冷泉帝との鏡に写し合うような関係をもう一組作りたくなかったという事情も、その理由の一つではあるまいか。紫上は源氏物語の中にのみ存在だ、ということ。物語の女という発想。

【15】女五宮は言う。「時々見たてまつらば、いとどしき命や延びはべらむ。今日は老いも忘れ、憂き世の嘆きみな去りぬるここちなむ」(191~2)。光源氏の神仙性が強調されている。桃園にふさわしい言葉である。が、この巻は、そういう光源氏の神仙性を破ってみせる巻なのではないか。ということは、神仙光源氏を一旦地上に落とす巻といいかえてもよいかもしれない。

【16】「三の宮」(192)というのは、大宮のことである。⇒【9】。こういう、言い方にも、ここ桃園に、過去が現役感覚で残っている雰囲気醸成する結果となっている。

【17】女五の宮の証言によれば、父・故式部卿も、光源氏と朝顔の結婚には賛成であった(192)。したがって、朝顔は、父の意思を振り切って自分の人生を選択したということが分かる。朝顔の人生選択の重さ・強さがしのばれる記述である。父の意思に殉じる印象の強い宇治大君より、朝顔の方が勝っていることに注意したい。女五宮は今、三宮つまり大宮のように、光源氏と縁を結びたく思っている。父・式部卿がそう思っていたように。

【18】女五宮の御殿より朝顔の住む御殿を見る光源氏の目に映った風景。「枯れ枯れなる前栽」。季節を表すと同時に、朝顔の世界の象徴ともなっている。

【19】女五宮と語り、おもむろに朝顔の部屋に渡る。花散里巻と同じ設定である。花散里巻で光源氏と花散里の対面の場を簡略にしたのは、この巻のための用意であったのであろうか。先に述べたように、この巻は、須磨帰りの最後の挨拶の巻であるから、花散里を補完する巻として捉えてよいのではないかと思われる。⇒【10】。

【20】「容貌も、いとゆかしくあはれにて」(192)とある。女五宮の衰えに驚いた光源氏が、朝顔の容貌を見たいと思うのは自然である。彼は、女五宮同様、若い日の朝顔しか知らないのかもしれない。⇒【8】。しかし、女五宮の老いの目移し効果と「暗うなりたるほど」という時刻のせいで、朝顔は結構若く見えた

かもしれないが、女五宮同様の時が、彼女の上にも流れていることは厳然たる事実である。

【21】「やがて簀子よりわたりたまふ」。集成頭注の言うように、光源氏は簀子に座っていて、女五宮と語っていたのである。その光源氏が朝顔の御殿に来ると、御簾をくぐって庇間に入る。つまらぬことだが、他人行儀な所と、無礼が許される所の差が対照的で歴然としていると思わぬか。

【22】まず、宣旨がでてくる(193)。いかにも前齋院らしい。末摘花巻などが思い出されよう。これも計算のうちか。

【23】宣旨の判断で、廂の間に光源氏を入れたこと。廂まで入ったのに、光源氏が「内外もゆる」(193)せと言う。これから判断して、光源氏と朝顔とはさうとうの深い関係であると推測される。もっとも、彼女は齋院であったのだから、光源氏とは潔い関係であることは当然であろうけれども。あるいは、あれはタブーを破った齋院就任であったのだ、とまで考えるべきであろうか。そう考えると、藤壺が生きてくる。となると、朝顔の拒否は、藤壺の復習だという発想になる。

【24】朝顔は言う。「ありし世は皆夢に見なして、今なむ、さめてはかなき」(193)。「さめてはかなき」は現在の朝顔のテーマ。逆に「ありし世の夢」を見ようとするのが、今の光源氏の立場である。

【25】光源氏の歌「人知れず神のゆるしを待ちしまにこらつれなき世を過ぐすかな」(193)。時の流れを強調している。朝顔が齋院に卜定してから、今日まで九年が経過している。致命的な時の流れである。彼女は葵上や藤壺と同世代であるから、現在三十代の後半であろうかと推測される。光源氏の年齢は、藤裏葉巻から逆算すると、この巻では三十二歳である。

【26】「今は、何のいさめにかかこたせたまはむとすらむ」(193)と光源氏は言う。朝顔は、齋院であるという事実を理由にして光源氏を拒んでいた。齋院を辞めた今、拒む理由は何もない。というのが光源氏の言い分である。先に朝顔の父の意思を女五宮から聞いていたので、光源氏は自信をもってこう言うことが出来たわけである。⇒【17】。朝顔にしてみれば、彼女の人生観でもって光源氏を拒んでいるのであって、齋院は体のいい口実にすぎない。このことは、この巻全体で強調される。

【27】光源氏は、朝顔に「なべて世にわずらはしきことさへはべりしのち、さまざまに思ひたまへ集めしかな。いかで片端をだに」(193)と須磨に言及する。須磨落ちには貴方との一件も無関係ではなかったはずだ。という論理である。この巻の、これまでのトーンである。しかし、朝顔は反応しない。絵合巻であれほど神通力を発揮した須磨の政治力も、朝顔の人生観の前では無力である。光源氏の力の及ばぬ強い世界を作者は今書こうとしている。朝顔の「世づかぬ

御ありさま」(194)が光源氏を拒む。このことは、権力者となった光源氏が味わう最初の挫折、という捉え方に道を開くものである。

【28】 漆標巻に描かれた、齋宮が齋宮を辞めた後の処置と、今回の場合は、対照的位置づけであろうかと思われる。

【29】 「科戸の風」は祝詞「六月の晦の大祓」に見える言葉。科戸の風が天の八重雲を吹き払うというイメージ。そのように天と地の罪を一挙に祓い清めるという文脈で使用されている。『倭訓栞』によれば、科戸の風は野分、つまり台風のことだとある。もっともな説明である。六月の晦日の大祓といえ、須磨海岸の出来事が思い出されよう。これは、あの時の大風が科戸の風だったという発想かもしれない。あの風で「その世の罪」はみな祓われ清められたというのが、光源氏の言い分である。これを、読者が認めるかどうか。藤壺との罪はいかが。朝顔との昔のことがもし本当ならどうか。⇒【23】。

【30】 「みそぎを神はいかがはべりけむ」(194)という宣旨のつつきは、意外な効果を光源氏に与えている。宣旨は、御祓いを、天と地の罪から「恋せじ」という禊ぎに転換している。この瞬間、光源氏のイメージは、『伊勢物語』六十五段の、恋せじと神に誓いつづけながら劣情に負ける烏滸男のイメージに取って代わってしまう。実際、現在の光源氏の様を言いて妙である。「まめやかにはいとかたはらいたし」と、さすがの光源氏も忸怩たる心境になっている。

【31】 座を立つ時の光源氏の言葉。「齢の積もりには、面なくこそなるわざなりけれ。世に知らぬやつれを、今ぞとだに聞こえさすべくやはもてなしたまひける」(194)。この巻の結果は、最初から歴然としている。光源氏の老齡意識。彼も確実に歳をとっているのだ。作者の前もっての宣言であろう。

【32】 光源氏の退場のシーンに「木の葉の音なひ」(194)、つまり落ち葉の音をかぶせるのはいい。一つの時代の終わりの暗示効果がある。

【33】 翌朝。光源氏が朝顔を贈るシーン(195~6)は、過去の再現である。作者は二人の最高の見せ場を書かずに、帯木巻の、噂の一行で、ここまで引っ張ってきたのである。藤壺と光源氏との最初の逢瀬を書かずにすませてきた作者のこのことから、これしきの我慢は何事でもなかったのかもしれないけれども。それにしても、そうとうの禁欲、無類の我慢強さである。

【34】 朝顔は秋の花。落ち葉の頃に咲いていることが分かる。ちょっと遅い気がする。この花は、牽牛子と呼ばれ、七夕の頃に花をつけるのが普通である。ここは末期の朝顔か。光源氏の歌「花の盛りは過ぎやしぬらむ」に符合する。朝顔の花を鑑賞するようになるのは江戸時代から。本来は漢方薬。種を粉末にし下剤として利用した。日本に伝えられたのは奈良時代との説もあるが、『古今集』に見えず『後撰集』にあるから、十世紀の中頃ではないかと推察される。有名になったのは、『源氏物語』のせいだと考えておいたほうがよいと思う。

- 【35】「見しをりのつゆ忘れぬ朝顔の花の盛りは過ぎやしぬらむ」(195)より判断するに、朝顔の顔、しかも朝の顔を光源氏が見たことが過去に一度あったのではないか。これは確かに、その昔あった二人の後朝の別れを想像させる歌である。この考えは、朝顔の一貫した「逢わずに愛する」思想と矛盾するようにみえる。しかし、おそらく光源氏が朝顔を見た時期は、彼が天帝の後にくっついて藤壺の部屋に自由に入出入りしていた頃ではないかと思われる。⇒【7】。幼なじみの、幼い慕情。そして幼い過ち。次巻、夕霧と雲居雁との場面は、藤壺や朝顔の初期の、描かれていない場面の影を曳くからこそ意味をもつと考えるべきかもしれない。
- 【36】朝顔の返歌。「秋果てて霧の籬にむすばほれあるかなきかにうつる朝顔」。老残の朝顔のイメージ。作者が落ち葉の頃の、名残の朝顔に着目したのは、このイメージのためであったかと推測される。
- 【37】「似つかはしき御よそへにつけても、露けく」(196)という朝顔の自己認識。伊勢の御の歌「夢にだに見ゆとはみえじあさなあさなわが面影に恥づる身なれば」が想起される。光源氏の「花の盛りは過ぎやしぬらむ」は、まさしく事実なのだという朝顔の冷徹な認識である。朝顔に伊勢のイメージを被せるということは、空蟬、そして藤壺という観念連合のなかに朝顔を取り込む処置であると判断される。
- 【38】「つきぎしくまねびなすには、ほほゆがむこともあめれば」という作者の弁解(196)は、帚木巻、中川の宿の場を彷彿させる記述である。⇒帚木巻【76】。語り手が、あの時と同じレベルの人であるということか。朝顔の歌がうろおほえで、本当はもっと上手だったかもしれないという語気は、作者の心が光源氏ではなく、朝顔にあることを、はからずも露呈している。
- 【39】「なほかく昔よりも離れぬ御けしきながら、くちをしくて過ぎぬるを」(196)とある。朝顔については、やはり見ただけで、それ以上の関係を結ぶことはなかったようである。⇒【35】。「宮は、そのかみだにこよなくおほし離れたりしを、今はまして」(197)という記述も参考になろう。
- 【40】「東の対」に「宣旨を迎へつつかたら」(196)ふ光源氏。紫上のいる西の対から一番遠い場所で秘密を持つ。彼の今の恋が真剣なものである証拠だろう。紫上が「けしきをだにかすめたまへかし」(198)と心の底で叫ぶほどに、光源氏は朝顔に本気である。
- 【41】宣旨をはじめとして、朝顔の女房は全員光源氏の味方である(197)。こういう環境で朝顔が「古りがたく同じさまなる御心ばへ」を貫き通すのは、並大抵のことでなかったと推察される。朝顔の拒否の重さである。
- 【42】朝顔が光源氏を拒む心理(197)。昔から拒んでいた。今の年齢、地位からして恋をするに相応しくない。

- 【43】二人の秘密が露顕した時の世間の反応に注目したい。「似げなからぬ御あはひならむ」(197)。朝顔は光源氏の正妻として相応しい女だというのである。となると、紫上とはどういう世間の評価の女であるのか、という素朴な疑問がおこる。彼女は光源氏の愛人で、愛がなくなれば捨てられる女なのではないのか。「対の上」(197)という呼称も、なにやら意味ありげだ。と、読者を一瞬でもそう思わせれば、この時点ではよかったのかもしれない。朝顔は、かくして、物語の女主人公・紫上の絶対的聖不可侵性を破り、彼女を相対化する存在となる。これは、若菜巻で登場し、その身分によって紫上を圧倒することになる女三宮の、軽い先触れということであろう。
- 【44】朝顔と紫上とは「同じ筋」(197)。いづれも親方の娘である。違うのは、世の「おほえ」(198)。朝顔の方が格別によいという点である。紫上の父は現在権力者であるが、彼女は父方を避けて育ち、また光源氏に幼いころから育ててもらったという負い目がある。「いとものはかなきさまにて見馴れたまへる年ごろのむつび、あなづらはしきかたにこそはあらめ」(198)。朝顔は、父は死んだが、家に五の宮が存在するという重みがある。母方も、それそうとうの身分であったのではないかと想像される。この紫上の「同じ筋」という思いは、若菜巻においてさらに増幅されて、もはや言わずもがなの形骸化した想念にすぎなくなる。紫上にとって、朝顔は、まさに女三宮の前座なのだ。⇒【43】。
- 【45】朝顔と光源氏の結婚成立後の自分の立場を想像する紫上(197~8)の姿は、明石巻以来の明石御方のイメージによって補強される。紫上は、ほやほやしていたら明石御方の運命を甘受することにならないか。このあたり源氏物語の、似たものを幾重にも重ねて安定感を出す重層構造が顕著である。
- 【46】「げに人の言はむなしかるまじきなめり」(198)。名言である。根も葉もない噂はない。
- 【47】「けしきをだにかすめたまへかし」(198)と紫上は思う。ということは、光源氏は、朝顔の一件を、紫上に一言も言わなかったということになる。紫上の本当の危機がいまここにある。
- 【48】冬、再び光源氏が桃園に行く。もう、朝顔の花はどこにもない季節である。「雪うち散りて艶なるたそかれ時」であった。
- 【49】「神事などもとまりてさうざうしきに」(198)。現在、藤壺の喪中で、宮中の華やかな行事は停止されている。藤壺の不在の強調。そういう雰囲気の中の、光源氏の行為であったということが、この一句で導入されている。泣くな紫上よ、そういうことなのだという作者の言いぐさが聞こえてくるようである。
- 【50】光源氏が「まかり申し」を言いやってきた時、紫上は「若君」をあやしている(199)。彼女は、明石姫君に夢中になることによって朝顔問題を耐えようとしているようにもみえる。彼女が姫君に夢中だから、光源氏が朝顔に走った

という解釈の余地を残す一場面である。

【51】あるいは、こうも考えられる。この巻で、紫上を揺すり、彼女の絶対性を破ってみせるのは、今彼女が抱えている明石姫君の絶対性を強調するためなのではないか。完全無欠なのは、紫上ではなく、明石姫君なのだ。という発想である。この発想に立てば、源氏物語のヒロインは紫上ではなくなる。紫上は、明石姫君に、絶対性を転移させるために、この巻で傷つくのだ。桐壺更衣から藤壺。藤壺から紫上を経て、絶対性はより純粋化され、明石姫君に結晶するという見方は、この巻で芽生えるのではないか。この時、紫上は姫君の乳母。古代神話風にいえば、玉依姫なのである。

【52】「馴れゆくこそ、げに憂きこと多かりけれ」（199）と紫上は言う。彼女の結婚生活のタブーであろう。常に新鮮な女でありつづけなければ意味をなさぬのが紫上の立場であるということ。若菜巻にある紫上の贅辞が思い出される。「去年よりは今年はまさり、昨日よりは今日はめづらしく、常に目馴れぬさまのしたまへる」。⇒若菜上巻。作者は、若菜巻を見据えて、確実に仕事をしているのである。

【53】雪の夕暮れ、出てゆく光源氏を見送る紫上（199～200）。雪の朝、女三宮の許から帰ってくる光源氏を迎える若菜巻の場面を十分に意識した場面であろう。源氏物語の構想の雄大さがあらためて分かる箇所である。⇒【52】。

【54】「宮に御消息聞こえたまひてければ」と言って、紫上をふり捨てて出てゆく光源氏。が、五の宮のほうは「今日しもわたりたまはじとおぼしける」（200）とある。光源氏は、もうちょっとで道化者となるような扱ひである。紫上のやる瀬なさ。光源氏のものぐるおしさ。対照歴然とした構成である。

【55】供人たちの反応もおもしろい。言い訳を言う光源氏に「いでや。御好き心の古りがたきぞ、あたら御疵なめる。軽々しきことも出で来なむ」（200）と「つぶやき」あっている。事態は完全に供人に把握されている。この巻での光源氏は、烏滸者である。⇒【30】【54】。

【56】桃園邸は、北側の門が通用門で、西側が正門であったと見える。正門はなかなか使用しないのが通例であったとみえる。寝殿造では、南には池がある。したがって南門は考えにくい。

【57】桃園邸正門の錠が錆び付いて開かない場面（200～1）はリアルである。これは、明らかに朝顔世界の象徴的表現であろう。「昨日今日とおぼすほどに、三十年のあなたにもなりにける世かな」という光源氏の感想は、この錠の開かない桃園邸を、光源氏が神仙桃源郷だと思っていたことを暴露する。⇒【4】。彼は、心の奥で桃園が時の流れぬ神仙境だと思い、かつそれを望んでいた。昔ながらの朝顔がいる世界。しかし、すでに錠は錆び付き、桃園は現実世界の時間に侵されて、とっくに神仙境ではなくなっているのである。光源氏が昨日今日を三十

年と感じた瞬間に、桃園異界のイメージは雲散霧消したというべきか。さても、この場面、末摘花の容貌にびっくりして帰った日の常陸宮家の門と良く似ている。古い宮家の門、である。

【58】光源氏の言う「三十年のあなた」は、時間のたつのが早いという諺なんかではない。実際の時間のちょっと大袈裟な表示にすぎない。光源氏が朝顔を見、朝顔に朝顔の花を贈ったのは、実際のところ、二十年近い過去のことである。帚木巻から、そのくらい時間は経過している。

【59】「かかるを見つつ、かりそめの宿りをえ思ひ捨てず、木草の色にも心移すよ」（201）と思いつつ、光源氏がまもなく六条院を造営するところが面白い。彼はまだまだ枯れた心境にはほど遠いのである。

【60】そして、女五の宮の欠伸と躰。さらには源典侍の存在が、光源氏の夢を完膚なきまでにうち砕く。桃園は断じて神仙境ではない。とりつくろいのような現実が露骨に姿をみせている修羅場なのだ。これは、夕顔を書いて末摘花で閉じた、かつての技法の再現である。忘れられない藤壺は、この朝顔の現実によって密閉されるのではあるまいか。あるいは、下手をして密閉封印に失敗することになるのかもしれないが。

【61】光源氏が桃園を尋ねて源典侍に出会うという構想は、薫が宇治を尋ねて弁に会うという構想と対になっているものと推察される。

【62】源典侍の登場の台詞は、蓬生巻で末摘花にやった光源氏の台詞と同じである。貴方がすっかりお忘れで声をかけてくれないから、私のほうから名乗り出ました。攻守ところを変えているのが可笑しい。

【63】「源典侍といひし人は、尼になりて、この宮の御弟子にてなむ行ふと聞きしかど」（201）より判断して、女五宮は出家しているし、源典侍も出家している。なのに、愛執から逃れていない。「うち戯れむとはなほ思へり」（202）。出家とは一体何なのだと思わぬか。

【64】源典侍の年齢は、紅葉賀巻に「五十七八」とあった。あの頃、光源氏は「二十の若人」であった。⇨紅葉賀巻【78】。今は、藤壺が三十七歳で死んでから間もない頃というのだから、紅葉賀の時点から十数年くらい経っていることが容易に分かるように作者がわざわざ書いていることが了解されよう。であるからして、現在、源典侍は七十歳ぐらいの老婆である。「いたうすげみたる口つき思ひやらるる声づかひ」になっていて当然である。朝顔は、藤壺と同時代の女だから、「入道の宮などの御齡よ」（202）と惜しまれつつ退場するとなれば、今しかないわけである。馬齢を重ねれば、女五の宮や源典侍の未来を待つばかりということになる。朝顔退場のための環境づくりが、女五の宮と源典侍の役目であろう。

【65】今の源典侍は、晩年の小町を思わせる。そもそも、小町は源典侍のような

境遇の女であったのではあるまいか。

【66】光源氏の言葉「親なしに臥せる旅人とはぐくみたまへかし」は、聖徳太子の歌と伝えられる「しなてるや片岡山に飯に飢ゑて臥せる旅人あはれ親なし」をふまえている。この歌をここで引用した理由は何か。源典侍を聖徳太子とした底意に何かあるのか。この太子歌は『拾遺集』の最後一つ前に載せられている。聖徳太子は「紫の上の御衣を脱」いで飢人にかけた。この飢人は「頭をもたげて」感謝の歌を詠む。これが『拾遺集』最後の歌。「いかるがや富緒河の絶えばこそ我が大君の御名を忘れぬ」である。これからすると、光源氏は、片岡山の飢人のように、絶対に源典侍の名前を忘れないという意味か。聖徳太子のように情けをかけてくれたら、という条件つきだけれども。冗談のレベルがかなり高いやりとり。

【67】「この盛りにいどみたまひし女御更衣、あるはひたすら亡くなりたまひ、あるはかひなくて、はかなき世にさすらへたまふもあべかめり」(202)という光源氏の述懐が、この朝顔世界を総括している。過去の名残り。まもなく消えてゆく世界。

【68】源典侍の歌。「年経れどこの契りこそ忘れね親の親とか言ひし一言」には、聖徳太子と片岡山の飢人とのやりとりが踏まえられている。忘れね。親。⇒【66】。

【69】この日、朝顔を訪れた光源氏の心理は、源典侍の場面を経由した結果、朝顔との関係にピリオドを打とうとする心理に傾斜している。「一言、憎しなども、人伝ならでのたまはせむを、思ひ絶ゆるふしにもせむ」(203~4)。

【70】朝顔の認識。「世の末に、さだすぎ、つきなきほどにて、一声もいとまばゆからむ」(204)。老いに顔をそむけぬ冷厳な自己認識であろう。源典侍とは対照的。光源氏自身の認識も、この朝顔の認識と無縁ではないはずである。彼が、これをうわべでしか意識していないだけにすぎない。このまま推移せんか、いつか手痛いシッペ返しをくらうことになるだろう。

【71】「昔にかはることはならはずなむ」(205)。朝顔の名言。朝顔は、まさに末摘花を美しくした女なのである。

【72】光源氏は言う。「いさら川などもなれなれしや」(205)。二人の昔の関係を匂わせる言葉である。「犬上や鳥籠(とこ)の山なるいさら川いさと答へてわが名もらすな」(『古今集』墨滅歌)。⇒【23】【29】。

【73】朝顔の述懐(205~6)を要約すると、およそ次のようになろうか。①光源氏に靡く世の光源氏ファンの一人となりたくない。②光源氏に誤解されたままでいたい。③つかず離れずの関係を維持しつつ生涯を閉じたい。④将来、出家したい。これをみると、朝顔の人物造型は、空蟬の夢、末摘花の夢、あるいは藤壺の夢の結晶体と位置づけることができる。「負けてやみなむもくちをしく」

(206) は、まさしく空蟬の時の光源氏の心境である。彼女の系譜の果てにいる女が、宇治の大君ということになるのか。レベルは朝顔に劣るけれども。

【74】今すぐに出家すると、この光源氏の求愛故だと思われるので避けたい。と朝顔は思っている。紫上の死後の光源氏の心境に同じである。朝顔の美学。しかし、この日は、彼女の出家生活の初日になったと見える。以後、「いたう御心づかひしたまひつつ、やうやう御行ひをのみしたまふ」ことになる。

【75】朝顔の周りは、全て光源氏の味方である(206)。これは、朝顔の人生の困難さを示すと同時に、朝顔が光源氏の勢力圏の内側で、空蟬のように光源氏に庇護されながら、生涯を終える密かな幸せを保証するものでもあろう。

【76】朝顔の「御兄弟の君達あまたものしたまへど、ひとつ御腹ならねば、いとうとうとしく」(206)とある。どのような兄弟であったか気にかかる所だ。この文面からみて、朝顔は格別の存在であったものと推測される。母方の血筋のよさは、十分予想される所だ。父が格別に目を掛けた点も想起されよう。

【77】紫上のもとに戻った光源氏は「今はさりとて心のどかにおほせ。おとなびたまひためれど、まだいと思ひやりもなく、人の心も見知らぬさまにものしたまふこそ、らうたけれ」(207)と言って紫上を慰める。最初、夜がれの理由を、藤壺の死による冷泉帝の悲しみを慰める必要性に言及し、また太政大臣の死による政務多忙のためであると説明する。次いで、本題の朝顔について言う。「まめまめしきさまにもあらぬ」「うしろめたうはあらじと思ひ直したまへ」。この言葉に誠はあるか。読者は「人の心を見知」った紫上の側に立って考えるはずである。紫上を頂点とする現実が戻ってきたのは、光源氏のせいでは断じてない。まして紫上の夫操縦法の成果でもない。朝顔の強烈な意思がなければ、紫上の予想通りの現実がやってくる結果となったであろうことは、とりつくろうことのできぬ現実であった。紫上の実力でもってしても、決して動かすことのできぬ現実が確かに存在する。これを、作者はこの巻で示し、紫上も読者もともに、この事実とことんつきあわされたことになる。これが若菜巻への露骨な布石でなくてはなにか。作者は、若菜巻を目指した仕事を確実にしているのである。

【78】「常なき世」(208)と光源氏は言う。この巻の、この位置で聞くと、非常に説得力のある言葉である。時は流れ、昔はどこにもない。

【79】紫上に朝顔のことを語る光源氏。「うしろめたうはあらじと思ひ直したまへ」(208)。これは、彼が変更できなかつた現実の糊塗、追認にすぎない。

【80】光源氏の美しさは、依然たるものがある。「人の御容貌も光まさりて見ゆ」(208)。ここにきて、神仙世界から墜落した印象の強かつた光源氏は、本来の神仙性を回復している。⇨【15】。神仙界と最初は思っていた桃園が、逆に、醜悪な現実の相貌を呈し光源氏の世界から墜落した。結果、紫上がいる世界こそ、神仙界なのだという現実が改めて確認されたということであろう。案外、この

点がこの巻のテーマなのかもしれない。朝顔効果である。

- 【81】冬の賛美(208～9)。「冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそ、あやしう、色なきものの身にしみて、この世のほかのことまで思ひ流され、おもしろさもあはれさも残らぬをりなれ」。冬の美の発見は、六条院四季絵巻の予行である。前巻で春秋が強調されていた。その連続で理解すべき箇所ではないか。さても、童女による、楽しげな月夜の雪まろばしの場合は、紫上の世界の素晴らしさを語り、と同時に朝顔事件の終わりを印象づける。
- 【82】「中宮の御前に雪の山つくられたりし」(209)は、明らかに『枕草子』雪山の段を意識的に利用したものだだろう。この伝でゆけば、六条院の四季は、『枕草子』初段の発想を取り込んだものと考えても悪くないのかもしれない。『枕草子』とて、初段に四季の素晴らしさを述べたということは、これから展開する定子中宮を中心とする世界が龍宮の神仙性のある世界なのだという作者の宣言として受けとめる必要があるかもしれない。清少納言が、そこまで観念していたとすれば、紫式部的であるが。
- 【83】藤壺のことについて紫上に語る光源氏(209～10)。彼の言葉は表面的で、その虚飾は、読者の充分に知るところである。朝顔のことといい、藤壺のことといい、光源氏は紫上の承知しない独自の世界を持ち、その世界の中で激しく動いたのが、薄雲・朝顔の両巻であったといえるだろう。これは、中年初期の、光源氏の、中年であることへの、いわば抵抗・反乱であったかもしれない。しかしながら、光源氏の世界は、もはや衰亡に瀕して、わずかに残っていた過去そのものであった朝顔に接近するも、その醜悪な現実とともに、強烈な朝顔の意思に出会って、その過去世界から光源氏は厳しく拒絶されてしまう。彼はもはや、紫上のいる美しい現実の世界に舞い戻るほかない。しかし、彼の、この時期のこの行為が、舞い戻る現実世界を取り仕切る女主人公紫上の心に与えた影響の深さは無視できるレベルではない。今後確実に尾を引くことが予測される。今回の朝顔事件は、紫上にとっては、明石御方などとは質の違う不可解な事件であったはずである。が、この事件によって彼女は、自分が陥る奈落の淵を覗いた実感をもったことは事実であろう。後の女三宮事件でもって、この事件の意味をようやく紫上は知るところとなる。その時は、もう取り返しがつかぬことになるのだけれども。紫上の悲しみの在り処を明確に示す意味で、この巻は、源氏物語の構想上きわめて重要な巻である。
- 【84】光源氏は紫上に「君こそは、さいへど、紫のゆゑこよなからずものしたまふめれど」(210)と言う。彼が紫上を愛している理由。それを光源氏は、これまでもこれからも決して口にしない。しかし、ここでは、その真相に接近した言辭を弄している。紫上は、これを全く理解していない。読者は、あらためてその真相を確認することになる。紫上は「紫のゆゑ」に愛されているにすぎな

いのだよ。という確認を読者がする時、紫上は、読者にとって客観的存在となる。紫上の絶対性は、この巻の、この事件によって確実に破られたのだ。⇒【43】。

【85】この光源氏による藤壺賛美は、この巻が、亡き藤壺を偲ぶ、光源氏のやるせない心情を語る意味合いをもつことの表明であろうと思われる。朝顔は光源氏がいみじくも紫上に語ったように「ただこの一所や、世に残りたまへらむ」(210)という藤壺時代の生き残りだからこそ、光源氏の心を乱したのだと考えれば、朝顔の思念はまさに正解であったということになる。この巻は、なんといっても藤壺追悼の巻なのである。

【86】朧月夜尚侍の思い出。「なまめかしう容貌よき女」(211)。上流階級の「夕顔」である。朝顔の花は、上流階級の花で、夕顔とは断然違っているということの意味しているのかも知れない。さても「うちあだけすきたる人の、年積もりゆくまに、いかに悔しきこと多からむ」は、光源氏自身のことをいっているのだけれど、雨夜品定めで語った女の第一の難「とりなせばあだめく」の具体例にも充分見える。

【87】紫上が、ここで朧月夜に言及したのは、彼女の須磨・明石意識である。と同時に、作者の側に立てば、若菜への布石ということになろう。若菜巻は、紫上にとっての第二の須磨・明石という位置取りであろうから。

【88】明石御方のこと。「身のほどにはややうち過ぎ、ものの心など得つ」女。彼女は、光源氏と紫上とのあいだで話題になっていることだけで満足すべきか。ともかくも認知されているのである。「人よりことなるべきもの」は、身分の低さをいっているのではなく、姫君の実母であること。失われた一族の血脈を伝える人という理解をしないと、源氏物語の構想を見誤るのではないか。

【89】花散里の安定。「さるかたにつけての心ばせ人にとりつつ見そめしより、同じやうに世をつつましげに思ひて過ぎぬる」(211)人。「かばかりの宿世」と認識した人生は、光源氏に評価され、今や安定軌道上にある。

【90】こういうオールキャストの批評は、一つの時代の終わり、新しい時代の開始を告げるものである。いうなれば、藤壺の時代から紫上の時代への転換。さらにいえば、明石姫君の時代の始まり。光源氏が紫上に藤壺の面影を改めて発見する条(212)は、まさにその象徴である。「恋きこゆる人の面影にふとおほえて」(212)。そのことで、光源氏の心が、朝顔に「いささか分くる御心もとりかさねつべし」と紫上に帰ってゆく。しかし、光源氏の中の紫上は、藤壺なのであって、紫上そのものではない。これでよいのか。藤壺の形代から、いつの日か紫上が脱出する時が来ることの、これもさりげない予告でもあろう。光源氏は、その時、藤壺の世界に取り残されるに違いない。藤壺にとってはもって瞑すべき事項であろうけれども。

【91】方々の批評は、次のようにも考えられる。現在、紫上が施しつつある明石

姫君にたいする女子教育のサンプル。最高級の素材をテキストとして、紫上は教育してゆくのだという暗示である。

【92】紫上の歌。「水閉じ石間の水はゆきなやみ空澄む月のかけぞながるる」(212)は絶品である。これからの彼女の人生を語って余りある歌だと思う。紫上は、この瞬間凍りつき、閉塞する印象は避けがたい。彼女は今、漠然たる不安を感じているのである。若菜巻は、実は、この紫上の閉塞感を破る巻なのだという考え方も可能ではないか。

【93】「宮の御ことを思ひつつ大殿籠れるに、夢ともなくほのかに見たてまつる」とある。ところ。小野小町の「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢としりせば覚めざらましを」(古今集 恋二)をふまえている。思うから夢に出る。近代的発想である。

【94】光源氏の夢に現れた藤壺に注目しよう。彼女は往生していない。「いみじく恨みたまへる御けしき」「苦しき目を見る」がその証拠である。このことが、源氏物語の今後に藤壺の影をひきずらせる結果となる。光源氏と藤壺の犯した罪は根強く残り、源氏物語を突き動かしてゆく原動力になる。「憂き名の隠れなかりければ」(212)、は決して紫上に藤壺を語ったそのことを指しているのではないだろう。冷泉院の秘密が漏洩してしまったことをいっていると考えるべきである。「このひとつことにてぞ、この世の濁りをすすいたまはざらむ」(213)。その意味で、この巻は、前巻にしっかりと連続している。そして、若菜巻に向かって、力強く前進する機能もたされる、というのがこの巻なのである。

【95】うなされた光源氏におどろいた紫上の声で、光源氏の夢は破れる。起きた光源氏は夢を紫上に語らなかった。藤壺は、かくして光源氏の胸の中にとどまって、紫上に流れ出ることはない。光源氏は、藤壺の世界の人なのではないか。と読者は再び思うはずである。藤壺追悼意識は、徹底している。

【96】藤壺のために阿弥陀仏を念ずる光源氏の姿を描いてこの巻が閉じられる。まったくもってこの巻が、藤壺追悼の巻であることが理解されよう。「同じ蓮に」と祈る光源氏。紫上はどうなるのだろうか。これは、現在の光源氏の心境を正直に述べたまでのことなのであろうか。紫上、孤独の印象もまたこの巻で確立する。

【97】光源氏の最後の歌。「かげ見ぬみつの瀬にやまどはむ」(214)は、女が初めて身を許した男に背負われて三途の川を渡るイメージである。藤壺を背負って渡すのは桐壺帝であろうから、「かげ見ぬ」といったのであろうか。それとも自分が背負って渡さねば渡れないはずだと光源氏は思っているのだろうか。

(注) 源氏物語本文は、石田穰二・清水好子校注「新潮古典集成 源氏物語」に拠っている。なお、括弧内数字は、その本文所在頁を示している。